



衛生害虫の相談支援ファイル

File.36

苦情者宅も空き家になった！ ——増加する“見えないごみ屋敷”

ちょっとだけ
リターンズ



やぐち のぼる
矢口 昇 豊島区池袋保健所



空き家事情は複雑です！

本号の特集にあわせ今回は、住民からの空き家の苦情や住環境の悪化でねずみや害虫が発生したごみ屋敷（ごみ部屋）にまつわる事例を、「衛生害虫の相談支援ファイル『ちょっとだけリターンズ』』ということで紹介したいと思います（連載再開ではありません。ごめんなさい）

さて、空き家の管理不足による住環境の悪化は、周辺住民から苦情になることがあります。

内容は、衛生・環境問題も含め多岐にわたります。生物では、ねずみ、ハチ、蚊、ゴキブリ、シロアリ、毛虫などの害虫、猫、タヌキ、ハクビシンや雑草、蔦、樹木の繁茂などがあり、そのほかにごみ及び不法投棄、悪臭、火災・不審者の侵入・倒壊などの不安を訴えることもあります。

以前、当連載のFILE.21（2017年12月号）「ねずみとごみ屋敷」で、ごみの定義は難しいと紹介しましたが、空き家事情も複雑です。例えば、別荘なども、住んでいない期間は空き家になります。

また、建物の新築・中古にかかわらず、賃貸や売却用の建物・住居は、借り手や買い手がいなければ空き家です。しかし、このような空き家は問題ありません。もし、管理が不十分で戸を開けてみたらゴ○ブリ

が走り回っていた、そんな物件でしたら買い手がつかなくなるからです。売れるように、管理されているはずですよ。

その他の空き家ですが、住人の転勤・入院中で長期不在や、一人暮らしの高齢者が施設入所。親が亡くなり空き家になったが、子どもは遠方に住んでいる、取り壊す予定のまま——などがあります。このような空き家事情は、管理不十分になる傾向がみられます。



苦情者の家が空き家になった

◎いずれも空き家予備軍です

初夏のある日、議員を通じて二軒の空き家を原因とする蚊の苦情がありました。その空き家は住宅が密集している地域にあり、苦情者は独居のおばあちゃんでした。

おばあちゃん宅はT字型道路傍にあり、道路を挟んで空き家が二軒、ピッタリ並んで建っています。低い塀に囲まれた平屋の空き家は、庭に雑草が繁茂しています。その隣の蔦の絡む二階建ての空き家は、もともとアパートで塀はなく、蔦越しに見る窓は板が貼られていて、日が差し込むことはありません。

相談者のおばあちゃん。昼は道路に面する庭に出て、通りかかる近隣住人とお話するのが楽しみでした。ですが、庭に出る

と「蚊に刺される」と困っており、「向かいの空き家の雑草と蔦が原因だから、何とかしてほしい」と訴えます。草木は蚊の成虫の潜み場所にはなりますが、発生原因は水が溜まったところでは？

そこで、水が溜まっている容器などが放置されていないか探しましたが、平屋の空き家には見つかりません。蔦が覆い被さる空き屋周りを探すと、蔦のカーテンに隠れて放置バケツが見つかりました。蚊は発生していませんでしたが、このままでは発生すると思われました。しかし、バケツの水は最近取り換えたかのように澄んでいるのです？ まさか人が？ いや、どう見ても空き家です。

念のため、郵便ポストやドア横の電気メーターを確認しました。すると、メーターがゆっくりと動いている……？

「エ〜！」と思ったときです。朽ちたドアが静かに開き、70歳代と思われる高齢者女性が現れたのです。「空き家じゃなかった！」近隣の方々は、誰も住んでいるとは気づいていませんでした。

この高齢者、自分の存在を知られたくないかのように生活していたのです。

それから数年後、先に空き家になったのは、蚊の被害で困っていたおばあちゃんのほうでした……。



見えないごみ屋敷

訪問しないとわからない、ごみ屋敷に関連するねずみや害虫の相談が増えています。

これまでの当連載では紹介していない事例をざっと述べると、

- ①介護認定・要支援1の独居高齢女性宅、ケアマネジャーさんからの相談です。二階建て一軒家、灯りが点かず、玄関先から真っ暗でごみに埋もれています。ごみで入れない部屋どころか、たどり着ける

のは一部屋のみです！ おばあちゃんはねずみと同居しています。

- ②認知症の独居高齢女性宅、地域包括支援センターからの相談です。大きな家に住んでいます。部屋はごみの山で、箱買いしているインスタントラーメンなど、ねずみは食べ放題のねずみ天国です。近隣住民がねずみを放していると怒っています。
- ③独居高齢男性宅、民生委員からの相談です。三階建て一軒家に住んでいます。台所を中心にごみだらけです。ゴ〇ブリと集団生活していました。
- ④高齢者世帯宅、蚊の調査で偶然見つけた家です。建物は古く修繕もされず外壁などは隙間だらけです。庭は草ボウボウ、植木鉢が転がり、軒下は雨水の溜まった放置物だらけ、空き家のようなこの家は、蚊の養殖場でした。

残念ですが、まだまだあります。ごみ、ねずみ、虫だけの問題では収まりません。火災などの被害が危惧される事例もあります。当連載のFile.1（2016年4月号）で紹介した独居高齢男性は、ごみ、ねずみ、ゴ〇ブリとともに、わが身も火事で消滅させてしまいました。

そのような例ではありませんが、次に特別なごみ屋敷を紹介します。

◎仕事が命！

ある日、保健師さんから独居おじいちゃん宅のねずみ相談がありました。

その家は、道路沿いにある二階建ての古い商店（金網細工作り場？）です。しかも、仕事は続けています。一階の仕事場はガラス張りの四枚戸ですが、中は腰まで厚紙や新聞紙が積み重なり、戸はいずれも開きません！

出入口は1カ所。壊れて胸下あたりのガラスが無い戸があり、そこから這いつく

ばって出入りができます。おじいちゃん、外に出るのは大嫌いです。材料の調達、商品の受注、食事の出前も電話でします。二階で寝る以外は、半世紀以上続けてきた金網細工の仕事をしています。商品の受け渡し、出前も、その壊れた箇所から現金でやり取りします。蓄積している白いボール紙は、金網細工の型紙の切れ端です。仕事場には、たまに来る弟子以外、人を入れません。

ですが、ねずみに型紙を齧られるのを嫌がり、私が入るのはオッケーでした。やっとの思いで中に入ると、仕事場は微妙に乳酸発酵のにおいがします。永年の蓄積からか、舞台のようにごみは平らにならされています。おじいちゃんは、その上で作業をしていました！

二階の部屋に型紙置場があると言うので、紙で埋もれている階段を登ると、これまた、新聞紙と紙で30cm以上も埋もれていました。しかし、ビックリしたのは部屋の真ん中に置いてある超危険な石油ストーブです！！（イラスト参照）

「とても危ないですよ」と話すと、「今まで燃えたことはないから大丈夫」と言います（……燃えていたら死んでマス……）。そこで、

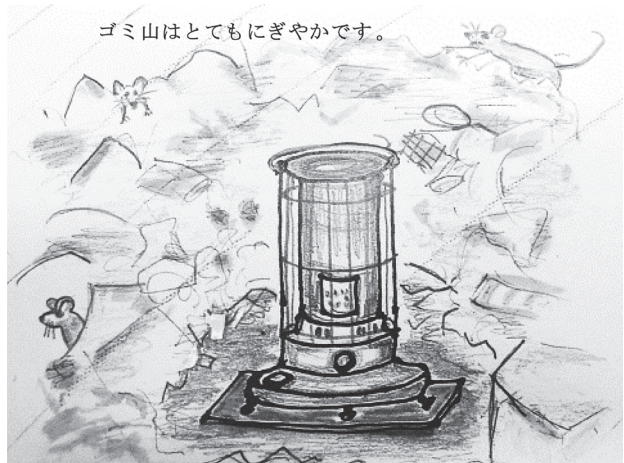
「ねずみの動きで火事になったら、仕事ができなくなります。紙はねずみの巣になるから、片付けないと増えて、型紙が齧られちゃいますよ」と話すと、なんとすぐに了解です。一週間後に訪問したら、その部屋だけですが、紙がなくなっていました！

火事よりも仕事ができなくなることのほうが心配（！）な、とても仕事が好きなおじいちゃんでした。



ねずみ・害虫対応の難しさ

ごみの解決が無理なら、せめてねずみや



超危険な石油ストーブ。ストーブ周りは紙だらけ！

虫の被害だけでも何とかしたいと相談が来ることがあります。しかし、ねずみなどの対応であっても、まずごみ問題を解決する必要があります。したがって、「ねずみだけ」「虫だけ」という要望に応えるのは難しいのですが、何もしないわけにはいきません。ねずみや害虫の対応が「きっかけ」となり、ごみ問題が解決・減少することだからです。それには、対象者の理解を得ることが必要です。

私は、ごみ屋敷・ごみ部屋対応の専門家ではありませんが、実践してきた心構えを紹介します。皆さまのお役に立てばよいのですが。

◎訪問するときの心構え

ごみ、ねずみなどの対応ですが、指導や注意するという姿勢ではうまくいきません。

「一緒に考えてくれる味方が来てくれた！」

と、思われるように心がけています。

向き合うというのではなく、二人で並んでベンチに座り、同じ方向を見ているかのように語りかけます。特に頑固な人、用心深い人、人が怖いという人は、家や部屋に入るときの印象で、その後の態度が変わる

ようです。この人間は安心できる、という印象を持ってもらうことが大切です。

無論、対象者が安心して人たちが、友人・ケアマネジャーやヘルパーの方などと一緒に訪問し、家に入る前に紹介してもらいます。なおかつ、いきなり部屋に姿を見せません。外から話しかける声や挨拶だけで第一印象が変わるからです。その延長線上で姿を現し、さらにていねいに挨拶をします。ただし、ていねい過ぎるのはよくありません。バランスですね。

服装も注意しています。新人のケースワーカーさんと認知症高齢母親と精神障害の息子さん宅に訪問したときです。そのケースワーカーさんは、スーツ・ネクタイ姿で上から目線の話しかた（本人はそうは思っていない）。私は、誰もが見慣れた作業服です。その後も数回訪問しましたが、気の毒に、ケースワーカーさんは毎回怒鳴られて話を聞いてもらえませんでした。

そんな私でも失敗はあり、帰りに「いくらですか？」と言われることも。オレオレ詐欺みたいで嫌ですね。そんな才能ありません（苦笑）。

対応内容ですが、人それぞれです。残念ですが、本文では紹介できません。ただ、どんな対象者であっても共通するのは、

- 安心感を与える
- 相手の気持ちで心配をしてあげる
- プライドを傷つけない
- 「こうしましょう」とは言わない
- 本人が自発的に決めるようにする
- 相手が望むことで進める
- 仏壇があったら軽く手を合わせる

——などを心がけて訪問すると良いようです。



ごみ屋敷の増加

人口減少・少子高齢化社会と核家族化・近隣と希薄になりがちな地域社会が進むと、取り残される人が増えると考えられます。特に都市部では、マンションやアパートなどの共同住宅に住む人も多いため、様々な原因の重なりとともに“外からではわからないごみ屋敷（ごみ部屋・汚部屋）”が増えると思われています。

孤立した高齢者や障害者宅に見られることは、ねずみや害虫被害があっても自らでは駆除ができない例が多く存在することです。

住居も、住む人の年齢とともに老朽化していきます。高齢者が介護認定されて訪問介護が入っても、建物が改善されたり、荷物やごみが減ることは減多にありません。

前記の事例①のおばあちゃん、体は動き、買い物もできます。このままですと、ごみに埋もれて死んでいくことになるかもしれません。ケアマネジャーさんは施設入所を勧めてはいますが、おばあちゃんは住みなれた、生きてきた証の家を捨てたくないのです。でも、もし施設に入ったとしても、空き家・ごみ屋敷が残りますね！ 本人がごみと認識しても、要介護になっても、ごみの対応は介護保険制度の対象外です。これが、少子高齢化などに関連して起きている現状のひとつです。

ところで、超危険なストーブのおじいちゃん宅ですが、弟子も手伝ったとはいえ、どうしてわずか一週間で大量の紙を片づけることができたのでしょうか？ 実は……家前の道路沿い50m先に紙専門の回収工場があり、白い厚紙は良質なので、喜んで回収してくれたのです！

捨てる「紙」あれば、拾う「神」ありですね！